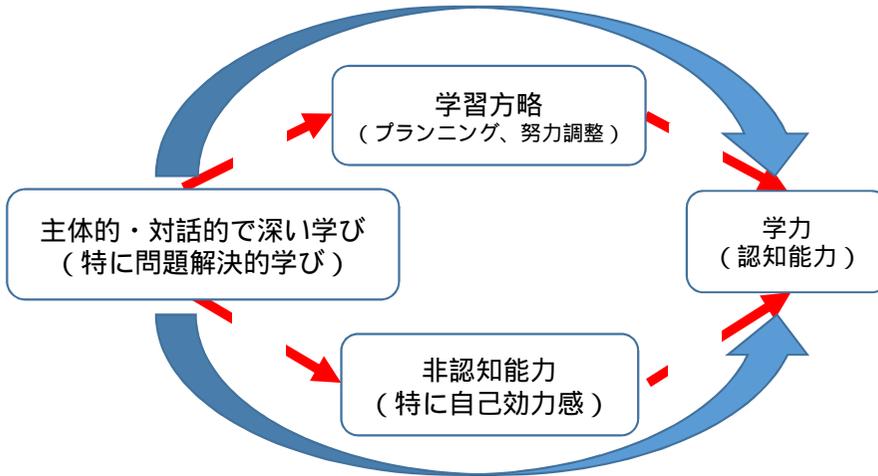


平成28年度 学力・学習状況調査データ分析結果(概要)

統計的な分析結果

主体的・対話的で深い学び(特に問題解決的学び)が、学習方略・非認知の向上を通じて学力を向上させている可能性



問題解決的な学びと学習方略の3カテゴリーは正の相関関係

- ・プランニング方略、作業方略、努力調整方略

学習方略の3カテゴリーと学力は正の相関関係

- ・プランニング方略、認知的方略、努力調整方略

主体的・対話的で深い学びと非認知能力は強い正の相関関係

非認知能力(特に自己効力感)と学力は正の相関関係

(参考) 子供が学習効果を高めるために意図的に行う活動(学習方法や態度)

- ・柔軟的方略(自分の状況に合わせて学習方法を柔軟に変更していく活動)
例: 勉強の順番を変えたり、分からないところを重点的に勉強する など
- ・プランニング方略(計画的に学習に取り組む活動)
例: 勉強を始める前に計画を立てる など
- ・作業方略(ノートに書く、声に出すといった、「作業」を中心に学習を進める活動)
例: 大切なところを繰り返し書く など
- ・人的リソース方略(友人を利用して学習を進める活動)
例: 友達に勉強のやり方や分からないところを聞く など
- ・認知方略(より自分の理解度を深めるような学習活動)
例: 勉強した内容を自分の言葉で理解する など
- ・努力調整方略(「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動)
例: 分からないところも諦めずに継続して学習する など

学校への実地調査から

「教科のより深い学びを実現するための大局的改善策」と「課題を抱えているポイントへの局所的改善策」が見られる。

「教科のより深い学びを実現するための大局的改善策」

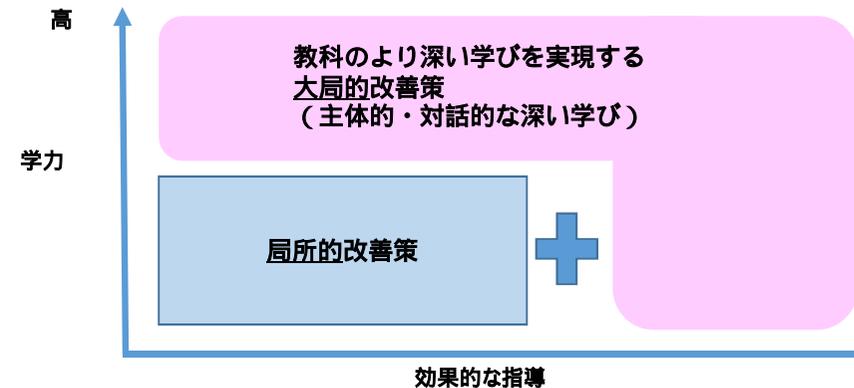
- ・学んでいることの意味や根拠を子供たちに考えさせる授業(主体的・対話的で深い学び)

全ての学力層の子供達の学習意欲の向上などに寄与し、全ての学力層の学力向上に効果的

「局所的な課題克服のための改善策」

- ・教師の示した範囲を着実に学習可能にするドリル学習(例)漢字問題や計算ドリルなどの単純反復ドリルを決まった時間や範囲で実施
- ・どう解けばいいのかわからないか、何を覚えるべきかを丁寧に教授する授業

低学力層の子供たちに計画的に学習に取り組む姿勢や学習意欲の向上などに寄与し、低学力層の学力向上に効果的



低学力層の子供たちには、問題の解き方などを丁寧に教えるような局所的改善策も必要であるが、全ての児童の学力向上には、学んでいることの意味などを深く考えさせるような大局的改善(主体的・対話的で深い学び)が求められる。

(参考資料) 学習方略や非認知能力について

学習方略とは

子供が学習効果を高めるために意図的に行う活動(学習方法や態度)であり、6種類に分類される。

柔軟的方略

自分の状況に合わせて学習方法を柔軟に変更していく活動
例: 勉強の順番を変えたり、分からないところを重点的に学習する など

プランニング方略

計画的に学習に取り組む活動
例: 勉強を始める前に計画を立てる など

作業方略

ノートに書く、声に出すとといった、「作業」を中心に学習を進める活動
例: 大切なところを繰り返し書く など

人的リソース方略

友人を利用して学習を進める活動
例: 友達に勉強のやり方や分からないところを聞く など

認知的方略

より自分の理解度を深めるような学習活動
例: 勉強した内容を自分の言葉で理解する など

努力調整方略

「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動
例: 分からないところも諦めずに継続して学習するなど

< 学習方略に関する質問 >

柔軟的方略	勉強のやり方が、自分にあっているかどうかを考えながら勉強する 勉強でわからないところがあったら、勉強のやり方をいろいろ変えてみる 勉強しているときに、やった内容をおぼえているかどうかをたしかめる 勉強する前に、これから何を勉強しなければならないかについて考える 勉強するときは、さいしょに計画をたててからはじめる
プランニング方略	勉強をしているときに、やっていることが正しくできているかどうかをたしかめる 勉強するときは、自分できめた計画にそっておこなう 勉強しているとき、たまに止まって、一度やったところを見なおす
作業方略	勉強するときは、参考書や事典などがすぐ使えるように準備しておく 勉強する前に、勉強に必要な本などを用意してから勉強するようにしている 勉強していて大切だと思ったところは、言われなくてもノートにまとめる 勉強で大切なところは、くり返して書いておぼえる
人的リソース方略	勉強でわからないところがあったら、友達にその答えをきく 勉強でわからないところがあったら、友達に勉強のやり方をきく 勉強のできる友達と、同じやり方で勉強する 勉強するときは、最後に友達と答えあわせをするようにする
認知的方略	勉強するときは、内容を自分の知っている言葉で理解するようにする 勉強していてわからないところがあったら、先生にきく 新しいことを勉強するとき、今までに勉強したことと関係があるかどうかを考えながら勉強する 学校の勉強をしているとき、とてもめんどろでつまらないと思うことがよくあるので、やろうとしていたことを終える前にやめてしまう
努力調整方略	いまやっていることが気に入らなかったとして、学校の勉強でよい成績をとるためにいっしょうけんめいがんばる 授業の内容がむずかしいときは、やらずにあきらめるか簡単なところだけ勉強する 問題が退屈でつまらないときでも、それが終わるまでなんとかやりつづけられるように努力する

非認知能力とは

テストで計測される学力やIQなどとは違い、自分の感情をコントロールして行動する力があるなど性格的な特徴のようなものです。児童生徒質問紙では「自制心」(小4・中1)、「自己効力感」(小5・中2)、「勤勉性」(小6・中3)を計測するための質問を()内の学年に出題している。

「自制心」

自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
例: イライラしていても人に八つ当たりしない など

「自己効力感」

自分はそれが実行できるという期待や自信
例: 難しい問題でも自分ならできると考えられる など

「勤勉性」

やるべきことをきちんとやることのできる力
例: 宿題が出されたらきちんと終わらせる など

< 非認知能力に関する質問 >

自制心	授業で必要なものをわすれたほかの子たちが話をしているときに、その子たちのじゃまをした 何からんぼうなことを言った 机・ロッカー・部屋が散らかっていたので、必要なものを見つけることができなかった 家や学校でカッとなくなってキレた 先生が、自分にたいして言っていたことを思い出すことができなかった きちんと話を聞かないといけないときにぼんやりしていた イライラしているときに、先生や親に口答えをした
自己効力感	授業ではよい評価をもらえるだろうと信じている 教科書の中でいちばんむずかしい問題も理解できると思う 授業で教えてもらった基本的なことは理解できたと思う 先生が出したいいちばんむずかしい問題も理解できると思う 学校の宿題や試験でよい成績をとることができると思う 学校でよい成績をとることができるだろうと思う 授業で教えてもらったことは使いこなせると思う 自分はこの授業でよくやっているほうだと思う
勤勉性	うっかりまちがえたりミスしたりしないように、やるべきことをやります ものは楽しみながらがんばってやります 自分がやるべきことにはきちんとかかります 授業中は自分がやっていることに集中します 宿題が終わったとき、ちゃんとできたかどうか何度も確認をします ルールや順番を守ります だれかと約束をしたら、それを守ります 自分の部屋やつくえのまわりはちらかっています 何かをはじめたら、ぜったいにおわらさなければなりません 学校で使うものは、きちんと整理していくほうです 宿題を終わらせてから、遊びます 気がちってしまうことはありません やらないといけないことはきちんとやります

平成28年度 学力・学習状況調査データ分析結果(概要)

(参考資料) 県学力・学習状況調査と分析委託について

< 県学力・学習状況調査(平成27年度～) >

調査目的	児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす
調査実施日	平成27年度:4月16日 平成28年度:4月14日
調査対象	県内公立小・中学校(さいたま市を除く)の小学校第4学年から中学校第3学年 平成27年度:小学校 708校 150,310名 中学校 360校 148,013名 平成28年度:小学校 708校 149,227名 中学校 356校 146,323名 2年間でのべ約60万人が受験
調査概要	(1)児童生徒に対する調査 ア 教科に関する調査 小学校第4学年から第6学年まで 国語、算数 中学校第1学年 国語、数学 中学校第2学年及び第3学年 国語、数学、英語 イ 質問紙調査 学習方略や学習意欲等に関する事項 (2)学校及び市町村教育委員会に対する調査 学校における教科指導の方法や市町村における独自の研修の実施状況等に関する事項
特徴	学力の経年変化などを継続して把握することのできる調査 ・問題の難易度を踏まえ、得点を調整することで異なる調査の結果を比較可能(項目反応理論の活用) ・同一児童生徒や学校の変化を継続して把握(パネルデータ)

< 調査結果の分析委託 >

平成27・28年度の調査結果について、統計処理や教科教育に関する専門的な研究機関に分析を委託

【委託先】

学校法人慶應義塾 慶應義塾大学SFC研究所

【主な研究担当者】

慶應義塾大学総合政策学部 中室 牧子 准教授
静岡大学大学院教育学研究科 益川 弘如 准教授

【分析・研究の手法】

- ・統計学の専門性を生かした、
学力の経年変化と子供達の質問紙調査結果の相関分析
- ・教科教育の視点からの学校現場の現地調査 など

～ 研究担当者の略歴～

中室 牧子 准教授

慶應義塾大学を卒業後、日本銀行、世界銀行での勤務を経て、コロンビア大学で博士を取得。産業構造審議会等、政府の諮問会議で有識者委員も務めている。専門は、経済学の理論や手法を用いて教育を分析する「教育経済学」。主な著書は「『学力』の経済学」、「原因と結果の経済学」等

益川 弘如 准教授

中京大学大学院を卒業後、中京大学大学院情報科学研究科情報認知科学専攻博士を取得。CoREF(大学発教育支援コンソーシアム推進機構)の協力研究員も務めている。学習科学、協調学習、ジグソー学習、ICTを活用した授業について研究。主な著書は、「21世紀型スキルー学びと評価の新たなかたち」、「インターネットを活用した協調学習の未来に向けて」等